
「折り返し地点」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「折り返し地点」

【Nコード】

N5727Z

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

ある人生の折り返し地点。

まずあなたに言わなければならぬことがあります。旦那は突然敬語でそう言つと、私の前に一通の茶封筒を差し出した。

「なに、これ」

私を手を伸ばすと、彼はさつと横からそれをさらつていき、封筒を逆さまにして中身をコタツの上にバラバラと落とした。

写真。私が浮気している現場。浮気相手と仲良く歩く姿。笑う私。笑う浮気相手。

「それから、これです。あなたが使つたんですよ」

旦那はそう言つて、今度は通帳を広げて見せた。旦那名義の通帳。残高ゼロ円。

「それから、これもです」

すぐそこで遊んでいた赤ん坊を抱き上げ私の前に差し出した。体中のあちこちにある無数のあざ。

そして最後に、旦那は、

「では、これに署名をしてください」

と言つて、離婚届の用紙を私の前に出した。

私はなんの躊躇もせず、さらさらと自分の名前を記入し、印鑑を押しした。

旦那はその離婚届をたたんでコートポケットに入れ、赤ん坊を左腕で抱き上げると、用意してあつた荷物を右手に持ち、さつさと玄関に向かい、ドアを開けて出て行った。きもちがいくらいにテキパキと事務的にいろんな処理をすませ消えた。

しーんと静まり返る部屋。

私はその静けさにしばらく身を委ねてから一呼吸ついた。

俺はアパートを出て、駅へと向かう。

ぐずる赤ん坊を抱きかかえ、切符を自動改札機にすべりこませる。ほとんど人のいない夜の電車に乗り込み、座席に座って一息をつき、横に赤ん坊を座らせた。

「あいつ、俺が気づいてないとも思ってたのか」

悪態づくくと、赤ん坊が泣き出した。

俺は舌打ちをして、電車を降りる。アパートからだいぶ離れた場所まで来た。泣き喚く赤ん坊をそこに残したまま、俺は電車を降りた。

あいつのここにいればあの赤ん坊は殺される。かと言って、俺は育てられない。

電車が遠ざかっていくのを見送る。

折り返し地点。

もういい頃だ。

あれから三十年経った。俺はあの時住んでいたアパートへ向かった。案の定、あいつはまだそこにいた。まだ住んでいた。

アパートの一階、インターホンを押して、中から出てきた六十代になったはずの元妻。

「戻ってきたんだ？」

元妻はぼんやりとした顔で笑った。

その背後から出てきた二十代から三十代くらいの女性。

「……誰だ」

俺は動揺を隠せなかった。

「あなたの娘じゃない」

元妻はバカにしたように鼻で笑って言った。

「あんたが捨てた娘。捨ててくると思ったわ。あんたが出ていった時ね、私はあなたの跡をつけてたのよ」

声を立てて笑う元妻に対して、娘は何の表情もないまま突っ立つ

ている。

「おまえが虐待してたからだろ！」

「虐待？ そんなことした覚えはないけど？」

悪びれる様子もなく彼女は言った。なに言ってたんだこいつは、開き直りやがって。

「おまえ、俺がずっと気づいてないとも思ってたのか」

「なにをよ？」

「あそこにあるものだ！」

俺は奥の部屋の床を指差して叫んだ。

「は？」

「あれを隠すためにここに居るんだろ、いつまでもそうやって」

「だからなんのことよ？」

「最初の子供だ。死んだだとか、置いてきただとか言ってたけど、殺したんだろ？ そこに死体を隠してんだろ？」

すると元妻の顔から笑顔が消えた。

「．．．．．あんなね、いい加減目を覚ましなよ」

そう言って、彼女は俺が指さした場所に歩いていき、床に敷いてあった絨毯をはがすと、下から出てきた小さな開き戸を開けた。

俺はその中を覗いて腰を抜かした。

そこには、大量の札束。

「なんだ、この金は．．．．．？」

俺の言葉に、怒りの表情に満ちた元妻が俺の背中を蹴飛ばした。

「あんたが盗んできた金でしょーが。私はずっとここに隠してあるのよ、一円たりとも手はつけてない。墓場まで持っていくためによ。最初の子供を殺したのもあんた。どこにやったんだか知らないけど。そして、この娘を虐待してたのもあんた！」

なにを言ってたんだ、この女は？

「あんたは、無意識に、自分の中の罪悪感を、他の人間の記憶と混同することで逃れようとしてんのよ！ いい加減目を覚ましなさい

よー」

俺はなぜ今更あのアパートに戻ったのだろう。

あいつの言うとおりだったのかもしれない。

無意識の中で、俺は俺の罪を清算するため、自分の中で抹消した
と思つてた記憶の中の罪を己に思い出させるために、あの場所へ戻
つたのかもしれない。

なぜ折り返し地点だと思つたのだろう。たぶんそれは、自分の死
が、不治の病による死に近いことで、ここから先の人生で何かを償
おうと思つたのかもしれない。

俺は、刑務所の中でそんなことを考えてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727z/>

「折り返し地点」

2011年12月19日01時50分発行